

富谷小だより

渋谷区立

富谷小

学校通信

あいさつの力、ことばの力

校長 石川 亜由美

卒業する6年生から手紙をもらうことがあります。ある年、「学校に行くことに気持ちがのらなかった日に、校長先生が門のところで『おはようございます』と笑顔で声をかけてくださったので、私の気持ちも明るくなりました」という内容の手紙をもらいました。手紙をもらったこともうれしかったですし、私がするあいさつによって、明るい気持ちになれた子供がいることにもうれしく思いました。

私自身も、毎朝、門に立って子供たちとあいさつを交わすことで、「今日も一日頑張ろう」という前向きな気持ちになっています。あいさつには、人の心を明るくし、元気を与え合う力があることを日々実感しています。

また、あいさつは、相手の存在を大切にする行為であるともいえます。あいさつを交わすことによって、「あなたを大事に思っています」という気持ちが自然と伝わります。学校で交わされる「おはようございます」、「ありがとう」、「大丈夫だよ」といったあいさつや声かけは、子供の心に安心感を与え、自分は大切にされている存在なのだという思いを育てます。そして、こうしたことばの積み重ねが、自己肯定感や人を思いやる心の土台となっていきます。

また、すすんであいさつをすることは、将来、社会の中で生きていくために大切な力でもあるといえます。職場や地域などで様々な人と出会う場面においてあいさつができることは、相手

の存在を認め、自分から関わろうとする第一歩であり、信頼関係を築く基盤となるものであるといえます。

2月は、人との思いやりのある関わり方を改めて意識する「ふれあい月間」の月でした。児童朝会の校長講話では、あいさつとあわせて、ことばの遣い方について子供たちに話しました。

大正・昭和期に活躍した思想家である中村天風は、「言葉は心をつくり、心は人生をつくる」と述べています。天風は、私たちが日々何気なく遣っている言葉が心のあり方を形づくり、その心の状態が生き方や人生そのものに大きな影響を与えると考えました。前向きで温かな言葉に触れれば心は安定し、意欲や勇気が生まれます。反対に、否定的な言葉が続けば心は弱り、不安や消極的な行動につながります。だからこそ、天風は、言葉を大切にし、心を整えることが、よりよい人生を築く土台になると説いたのです。大谷翔平選手や松下幸之助氏など、日本を代表する著名人もその教えに傾倒したと知られています。

自分の発することばをいちばん近くでいちばん多く聞いているのは、間違いなく自分自身です。ですから、自分の発することばが自分の心に特に大きな影響を及ぼします。ネガティブな発言を繰り返していると、心もネガティブになります。あまり考えずに汚い言葉を発し続けていると、心も徐々にそのようになっていきます。反対に、ポジティブな発言を繰り返すことで自分の心もポジティブになります。そしてそれは、周りの人にもよい影響を与えます。

だからこそ、子供たちが毎日どのようなことばに囲まれて過ごしているかはとても大切です。

年度末にあたり、改めて、あいさつやことばの遣い方を意識し、学校と家庭とで子供たちの心を育てていきたいと思っています。



正門前のあんずの花が満開です。